

# 哲學研究

第四十一號

第四卷  
第八冊

## デカートの「規則論」に於ける「直覺」

朝永三十郎

嘗て本誌(第三十一及び三十二號)に載せた「デカートの「規則論」に現はれたる批判的思想」が非常に不整頓なものであつたから、其補遺の一端にもと此一編を草した。前の論文と同様オトルブの研究に多く負ふたものである。前の論文と多少重複する様な處もある(單純物性に關する部分)が説明の便宜上省略しなかつた。

—

知らるゝ如くデカートは數學を他の一切の可能的な學の模範として出發して、感性經驗が屢誤謬を惹起すに反して演繹が正確なる認識を供給することを認めた。演繹とはデカートは依れば若干の眞理をば後繼者が先行者よりして必然的に派生され若くは理解される様に結付ける謂である(R. III, 5. 13<sup>o</sup>)。併し此場合結付けられる終極の基本たるべき眞理は當然、其自身派生され得ざる、直接に、其自身に確實な

る認識、即ちデカートの所謂「直覺」*intuitus* (C) でなければならぬ。斯くて正確なる認識に到達すべき道は直覺と演繹とであるとデカートは考へたのであるが、併しデカートに依れば演繹も終極は直覺に還元されるべきものである。直覺の特徴は其の認識が「繼續的でなく全體同時に」*tota simul et non successive* 成立ち「現前の明證」*praesens evidentia* を伴ふといふ點にあり、演繹の特徴は繼續的に一の認識より他の認識を導出す「精神の運動」であるといふ點にあるといふ相違はあるが、併し演繹に於ける直覺に基いた隣接二項の結合は又た全體同時に直接に認識され其自身に確實でなければならぬ、即ち演繹に於ける一つ一つの必然的派生は直覺でなければならぬ。唯、演繹の場合には真理の派生が若干の項を経由する結果、直接に隣接する二項の結合は直覺であるに拘らず多數の項の一端より他端への進行は記憶(記憶がデカートの心理學に於て如何なるものなるかに就ては註(二)を見よ)の援助を要する、即ち直覺と演繹との相違は單に確實性の認識が端的なるか若くは記憶の援助を借るかといふ點にあるのみであつて、演繹の場合と雖も其認識の確實性其者は全然直覺に基いて居るとするのである。(R. III, S. 13; R. VII, S. 33)

デカートは尙ほ認識に必要な道として直覺及び演繹の外に第三の、彼れが枚擧

Enumeration 又は歸納 Induction と呼んだものを擧げた (R. VI. XI)。歸納とは提出されたる問題に關する事項をば、充足的に枚擧精査することである (L. VI., S. 32)。若干の命題の系列が順次に連續して派生さるゝ場合には其演繹は、其項は如何に多くとも前述のやうに直ちに多くの直覺の連續として見ることが出来るが、併し一命題が互に、直接に、連絡なき諸命題の群より演繹さるゝ場合には、其れは不可能なることがある。此場合には吾々は先づ當該問題に關する事項をば充足的に枚擧して其一々に就て考查し、其結果の凡てよりして件の一命題を派生する、即ち歸納に訴へるより外はない。但し「充足的」といふは其證明の連鎖に斷絶がないといふ程度を指さすのであつて必ずしも「完全」completus 即ち悉くを枚擧するといふ意味ではない。例へば今吾々が世界には幾何種の形體的存在物ありやといふとを問ふとすれば、吾々は世界中に於ける形體的存在物のあらゆる種類を一々考查し其れを互に判明に區別せし後に非ざれば之に答ふることは出來ぬ、即ち其歸納は「完全」でなければならぬ。併し例へば理性的靈魂は物質的ならずといふことを歸納に依て證明せんとするに當ては必ずしも「完全」の枚擧を要せず、唯一切の物體を一定數の種類の纏め、靈魂が其何れにも屬せざることを證明し得れば充分である。此場合には枚擧は完全ではない

が判別的 *distinctus* である。最後に例へば圓の面積は之と等しき周圍を有する他の如何なる形の其れよりも大なりといふことを證明せんとするに當ては、吾々は一切の形の種類を枚擧することをも、或は一切の形を一定數の種類に纏めることをも要せず、唯或格段なる形に就て之を證明し、歸納に依て之を他の形に推論すれば足る。此場合には歸納は「完全」でも判別的でもないが併し充足的である。(R. III, p. 33 ff.) 是等の實例は尙ほ種々の疑問を其中に含むと思ふが、今は唯デカートの枚擧なるものゝ一般的性質を説明する材料として利用するに止めて置く。但しデカートに依れば知識の確實性上演繹が直覺に還元されると同様に歸納は又た演繹に還元される。歸納は畢竟煩雜なる複合的なる問題をば其れの演繹的解決が依存すべき單純なる制約に分解する作用に外ならないから、其れは演繹に導き行くと同様に又た演繹を豫想するものでなければならぬ。實は其れが演繹と異なる點も亦た唯記<sup>○</sup>憶<sup>○</sup>の援助を要するといふことのみである(R. XI, p. 52)。兩者の相違は到達されたる知識其者の種類に存するといふよりも寧ろ之に到達する順序、即ち一の場合に於ては一般より格段へ、他の場合に於ては格段より一般へ進むといふ點に存するのである。斯くてデカートに依れば一切の知識の確實性は終極彼れの所謂直覺に基くと

ふこととなる。其故に彼れの所謂直覺なるものゝ性質を精査するといふことは彼れの認識論の考査に於て最重要なる問題となつて來る。

## 二

直覺とは、デカールに依れば絶對的に疑ひの餘地を存せざる「純粹なる且つ注意したる精神の單純判明なる認知」或は「唯理性の光明のみより起る、純粹なる且つ注意したる精神の疑ふ餘地なき認知である（…… *mentis purae et arte utrae tam facilem distinctumque conceptum, ut de eo, quod intelligimus, nulla prorsus dubitatio relinquat ur; seu, quod idem est, mentis purae et attentae non dubium conceptum, qui a sola rationis luce nascitur*……X., p. 363.) デカール

は又此直覺をば屢特に「精神の直覺」*intuitus mentis*と呼んで居るが、其れは普通の意味に於ける *intuitus* 即ち感性的直觀と區別せんが爲めである。デカールの直覺は知覺、記憶、想像等が感官作用若くは之に基くものなるに反して「純粹悟性」<sup>(11)</sup>又は「純粹なる精神」或は「唯理性の光明のみ」より起るところの、直接不可派生的にして絶對的確實性の確信を伴ふところの認知である。但し「純粹悟性」、「純粹なる精神」、「唯理性の光明のみ」等の語をデカールの假說的心理説(註三)を參照)と結付けて解すれば、直覺は肉體より

全然獨立なる精神の作用従つて又た肉體作用に基いて成立つ感性知覺記憶、想像等即ち經驗より全然獨立であると解せられ、第一にカントが直觀 *Anschauung* と概念とを區別したやうな意味に於て概念的思惟であるといふことを意味する様にも思はるゝか併しさうではない。デカートの純粹悟性認識としての直覺中にはカントの所謂直觀をも排擠しない。此事は第一にデカートが之を示すに故意に「熟視する」*intueor* の分詞なる *intuens* の語を用ゐたこと(R. III, S. 12)而して現に其の意味を視覺作用と比較して説明したこと(R. IX, S. 4)等に依ても推することが出来るが更にデカートが常に數學をば直覺的認識の典型と見たといふ事實が最明かに之を證する。何となれば數學をば全然直觀 *Anschauung* より引離すといふことは未だ何れの哲學者も試みざりしことであり、殊にデカート自身現に(R. XIV, S. 33)數學的對象の表象に想像 *imaginatio* の缺ぐべからざることを力説して、例へば延長物を離れたる延長、數へらるゝ物象を離れたる數、厚さなき平面、廣さなき線、延長なき點といふが如き想像作用を離れたる純粹なる哲學的對象 *entia philosophica* 又は抽象的對象 *entia abstracta* の概念を排して居る。尙ほデカートの同様の思想を更に明確に示すものは彼れの單純物性 *natura simpliciter* に關する所説である。

デカルトは一切の事物を認識の順序上又は吾々の認識に關係して(此句の意味は後に説明する機會がある)「單純」或は「絶對的」及び「複合的」(compositus) 或は「關係的」(respectivum)の兩者に別つた。前者は吾々の認識上其以上分析され得ざる、其れ以上定義され得ざる、其自身に依て知らるゝ、*per se notae*、吾々は唯其れの複雑なる結合より其れを解きほぐして一つ一つ直覺的に認識し得るのみであるところの要素又は物性である。而してデカルトに依れば單純物性は、(一)例へば無知、執意等といふが如き、悟性が感性表象の助を借らずして其自然知 *inmen naturale* に依て認識し得る、即ち純悟性的 *pure intellectuales* のもの、(二)例へば形状、延長、運動といふが如き、吾々が單に物體にのみ存するとして認識する、即ち純物質的 *pure materiales* のもの、(三)例へば存在、繼續といふが如き物體及び精神の双方に歸せられ得る、即ち兩者に共通なる概念 *notiones communes* の三種に大別される。尙ほ他の單純物性を結付ける爲めに用ゐらるゝ連帶とも稱すべき、而して其明證に基いて推理が行はるゝところの概念、例へば二者が共に第三者に等しければ其れは又た互に相等しといふが如き概念も此三種に屬する。此單純物性はデカルトに依れば直覺の重要な對象であるが (*R. VII, S. 68*) 其第二及び第三種に對しては悟性は此の如く感官及び想像を要する、殊に形状、延長、運

動等は自然知のみにて認識さるゝ純知的單純物性には屬しない。

併しデカートの直覺の範圍は單に是等の單純物性のみに限られて居ない。デカートに依れば直覺は單純物性のみならず、更に其相互の必然的結合の認識、而して最後に悟性が其自身若くば想像中にありと精確に經驗するところの他の一切 (ad reliqua omnia quae intellectus praecise, vel in se ipso, vel in phantasia esse experitur) に擴がる。(R. XII, S. 68)。單純物性の必然的結合といふことの意味は後に讓つて、茲に悟性が自己自身若くば想像中にありと明確に經驗するところの他の一切とは如何なるものであるかを先づ吟味して見やう。

### III

蓋し、デカートは不定なる感官の所示や誤れる結合作用を營む想像の判斷をば常に確實なる認識の最大障碍として排斥したが、併し近世自然科學的思潮の洗禮を受け、數學家として演繹を重視すると共に天文、物理、生理學上の實驗的研究に深き關心を有して居た彼は古代の純理論者の如く感官の所示や想像の結合をば根柢よりして排斥することは出來なかつた。感官の所示は常に不定であるか。想像は常に誤



れる結合を營むか。數學に於ける根本命題が勝れたる確實性を有し確實なる認識の基礎となり得るは其れが單純にして明白なるが故であるとデカールはしたのであるが、之と同様確實なる認識の基礎となり得る何等かの單純明白なる經驗が無いであらうか。デカールは此の如き要求に應じて其直覺及び演繹の原理に矛盾することなく經驗科學に基礎を與へんが爲めに其直覺の範圍を擴めねばならなかつた。先づ彼は規則第五に於て、經驗を輕視する哲學者をば、恰かもミネルヴがユピテルの頭部より跳出でしが如く眞理は己れ等の腦髓より跳出でると思ふ者として擲諭し、又た天體の性質に就て何等識るところなく、其運動を注意觀察することすらなさずして其れの作用を決定左右し得べしとする星占家に比べて居る(De Cog. 24)。而して更に規則第八に於ては複合的且つ關係的の物に就ては經驗の所示は信賴し難いが、單純且つ「絶對的」の物に就ては信賴し得るといふことが後に説かるべきことを簡單に併し明白に豫説し(De Cog. 27)、最後に規則第十二に於て下の様に説いて居る。悟性は與へられたるものを其自身及び想像中に存する儘に受取つて其れに關して何等の判斷をも下さざる以上、決して經驗に依て欺かるゝことは無い、誤謬は想像が忠實に感覺の對象を、感覺が忠實に心外對象を模寫すると判斷するに依て起る。誤謬は不正

の判断である。感覺や想像は唯表象のみの能力であつて其自身判断の力を有せず、従つて其自身誤謬の生源たることは出來ぬ。吾々を誤謬に導くものは經驗其者に非ずして悟性が之に附加したる概念である、併し又た此誤謬を匡正するものも亦正しき判断を下すところの、自己の概念を正しく適用するところの悟性其者の外にはあり得ない。斯く考うれば單に單純物性のみならず複合物性と雖も必ずしも吾々を欺くとは限らない。複合物性には吾々自身が之を複合したものと、經驗がしか複合されて居るとして吾々に示すものとの兩者を區別することが出来るが、後者は唯の表象としては何等の誤謬をも含まない。誤謬を含む可能性を有するは前者のみである。後者が誤謬となるは其表象をば存在なる悟性概念と結付け性結果、即ち前者となつた結果である。斯くて眞僞問題の起るは唯吾々が結付けた複合物性の場合のみである。(D. 66 ff.)

然らば吾々に依てなされた如何なる結合が眞にして如何なる結合が僞であるかといふ問題が起るのであるが、其考査は暫く後に譲つて、上述に基いてデカールが直覺と呼んだものゝ性質を概観せねばならぬ。

## 四

上述に依て吾々はデカートの直覺が極めて雜駁なものを含むといふことを知ることが出来る。其中には單一の表象もあれば其結合たる判斷もある。根本概念(Grundbegriffe)と根本命題(Grundsätze)とが一列に其中に含まれて居る。第三種の單純物性(notiones communes)の一として擧げられた、第三者に等しき兩者は相等しといふ公理や又たデカートが直覺の中を含めた、後に説明さるべき、單純物性の必然的結合は判斷の形を取つて居る。更に他の點より見て、カントが區別した意味に於ける概念と直觀と、純粹直觀と經驗的直觀とが混沌状態をなして雜然として其中に含まれて居る。デカートは數學の直觀性をばあれ程明確に承認したが、併し數學的知識と純論理的知識との別に注意せず、等しく「純粹悟性に基くもの」として其共通性のみを明説して兩者を明確に區別しなかつた。若し此區別を充分明確にしたならばカントの感性的と知性的との區別竝に粹純直觀の概念に到達し得たであらうと想像するところが出る。更に、前述の如く悟性が其自身若くば想像中に在りと「精確」(præcis)に經驗するところのものは凡て直覺であると説き、精確であるといふ一條条件さへ充たせば凡て

が平等に悟性の原理たることを認めて其中に重要な區別あるを認めて居ない。但し彼れも光及び音の強さといふが如き感性的性質は「精確」に規定することは出来ないが純粹延長のみは等しく「想像」の對象であるにも拘らず「精確」に規定することが出来る」と説いて居る (B. XIV) が、此點を更に精細に認識論的に追究し行つたならば又た純粹直觀の概念に到達し得べきであるが、其れは出来なかつた。<sup>(五)</sup>

尙ほ又たデカートの直覺の概念には前後に動搖があるといふとも上述に依て否定するとは出来ぬ。純粹悟性の原理としての直覺は、其心理説に於て純粹悟性と對立して居る感性知覺や想像と結付き、或は之に援助されるのみならず、更に其感性知覺や想像までも其中に含まるゝに至つて居る。これは畢竟尙ほ後代まで哲學が脱することの出来なかつた、純批判的設問と心理學的設問との混交の結果と見られねばならぬ。實を言へば「規則論」に於けるデカートはカント前の哲學者中最多く此混交を脱した思想家であつて、現に彼は其心理説を説くに當ては常に假説として説いて居るのであるが、併し此假説的心理説は絶えず其認識論的考察の方向を支配して其徹底を妨げて居る。要するに上述の動搖は此兩設問の混交と、彼れが新興自然科学に重要な價值を認め古代の純理論の如く感性經驗に對して極端な瑣國的態度

を取り得なかつたことゝが相結付いて生んだ自然の産物であると思ふことが出来ると思ふ。

## 五

併しデカートの純粹悟性認識としての直覺中に感性經驗を含むといふことは純理論者としての(少くとも規則論に現はれたる)デカルトに對して普通試みらるゝ批評や攻撃の或者を無効ならしめる。第一に彼をばベーコンと對比して認識論上純理的思惟のみに價値を置いて全然感性經驗を排斥したと見るは言ふまでもなく不當である。ベーコンが感性經驗のみに價値を置いて學問研究の上に於ける純理的思惟、演繹的思惟の意義を無視したといふは事實である。併しデカルトを以て其正反對の極端に走つたと見るは事實でない。従つてロックがデカルトを重要な代表者と見て純理論者に向けたといふ非難、デカルトは其眼を閉ぢ耳を塞いで一切の感官の所示を排する間は徹底して居るが、自ら解剖生理の實驗的研究に専心するは矛盾であるといふ非難も不當である。従つて又たデカルトが物理學者としてガリレイやニュートンに及ばざる所以も亦た決して認識論上經驗の必要を認めなかつた點に存するのではない。若し物理研究に於けるデカルトの缺點を言へば假説を立

つるに充分の慎重と細心とを缺いたといふ點にある。此缺點は知らるゝ如く彼れの體系に於ては其自然哲學及人性論に最顯著に且つ頻繁に現はれて居るが、此過失は決して其認識論より來つたのではなくして、寧ろ其精神に背反した結果である。彼はコペルニクスを大發見に導いたといふ、事物の眞理は單純ならざる可らずといふ確信に餘り強く動かされて、現象の説明に當て、單純なる豫想でさへあるならば唯其れ丈けの理由を以て眞であるとするといふ誤想に陥つたのであつた。彼は現に(四)吾々は幾何學に於て任意の假定に依て問題を解くことを許して居る以上、他の事物の説明に於ても若し其れが事物を明晰にし得さへすれば之を許さざる理はないではないか、假定は之を單なる假定として取つて眞理として確認せざる間は決して吾々を欺くものでない、と説いて居る。此見解の結果は其自然哲學や人性論に於ける假説の濫造となつて現はれたのである。デカールは前述の様に假説と嚴密なる意味に於ける眞理とを嚴密に區別せねばならぬことを説き、多くの學者が明晰確實の認識を以て満足せず、不確實なる想像説を立て、之を眞理に關する判斷と混同することを非難して居るが、併し彼自身屢此戒めを破り、蓋然説より出發して何時の間にか之を確説に變じて推理を進め、其認識論に於て科學に對してなした彼れの嚴密

なる要求を裏切つた、而して其確實の度に於て彼れが非難した先人の説と大差なき、幾多の臆説を以て綴り合せた自然哲學や人性論を説くに至つたのである。彼が科學者としてガリレイやニュートンに及ばなかつた重なる原因は此處に在ると思はれる。

## 六

議論は稍々岐路に入つたが、本論に歸る。デカートの直覺は單純物性の必然的結合を含むと言つたが、其必然的結合とは如何なるものであるか。單純物性其者には誤謬を含まない、複合物性も亦經驗が複合したものとして示す儘のものは誤謬を含まない、誤謬は吾々が單純物性を結付けて考ふる場合にのみ起る。但し此種の結合に必然的、偶然的との二種がある。一物の概念が他物の概念と不明瞭な仕方を以て (confuse) 不可離的に結付けて其れを離して考ふれば其何れかを判明に考へることが出來ぬ場合に其結合を必然的といふ。形を延長より、或は運動を持続又は時間より離して判明に考ふることは出來ぬ。其故に形は延長と運動は時間と必然的に結付く。七は三と四とを不明瞭な仕方を以て其中に含めることなくしては判明に考

へることは出來ぬ、其故に「 $\mu + \omega \parallel$ 」は必然的結合である。例を直觀的對象以外に取れば、例へばソークラテースが予は一切を疑ふといふ時に、彼は少くとも彼が疑ふといふことを知る、又た彼は眞僞の別あることを許す、といふことが必然的に續く、即ち是等の事項は、疑ひと必然的に結付いて居るのである。之に反して不可離でない結合は凡て偶然的である。例へば人と衣服との間には不可離的の關係は無い、其故に「人は衣服を着る」といふ判断は偶然的である。學問上眞と言はるべき判断は必然的結合に依るものであつて、學問の要務は普通注意されざる此の如き必然的結合を發見するにある。而してデカールに依れば第一に單純物性の認識は直覺であるが、更に其必然的結合の認識も記憶の援助を借らず直接なる限り又た之に屬する、唯必然的結合の序列が連鎖を成し其一端より他端への進行が記憶の援助を要する場合に演繹となる。斯くて、正確なる認識に到達すべき道は直覺と演繹との二途であると言つたデカールの意味が充分明かとなつた。

## 七

併し此必然的結合に就て尙ほ新たなる問題が起る。デカールが必然的結合の場



合には一概念が他概念に不、明、瞭、な、仕、方、を、以、て、含、ま、れ、て、居、る、と、し、た、こ、と、は、必、然、的、結、合、を、ば、カ、ン、ト、の、意、味、に、於、て、分、析、的、と、見、た、の、で、は、な、い、か。併し此解釋はデカールが明説した、單純物性の性質に關する豫想と調和が困難である。デカールは曩きに單純物性と複合物性とを區別した場合に、認識の順序上又は、吾々の認識に關してなる制限句を附加へて居るか、其れを下の様<sub>に</sub>説明して居る。これは、物の事實的存在上又は、事實的存在に關してと區別せんが爲めである。例へば今一定の延長と形狀とを有する或物體を考ふるに、其の存在上より言へば其れは最初獨立に存する物質、延長、形狀なる三物性が集まつて成ると考へることは出來ないが、併し吾々の悟性に對する關係より言へば、吾々が此三者が同一の主體に同時に結付いて存すると判斷し得るに先つて之を一つ一つ離して認識して、然る後に此物體は此三者の結合であると考へねばならぬと(De G<sub>2</sub>)。即ち彼に依れば、悟性に對しては延長と形狀とは本來は一が他の中に含まるといふ關係に立つものでなくして全然夫々獨立のものである。従つて必然的判斷に依ての兩者の結合はデカールを齊合的に解せんが爲めにはカントの意味に於て分析判斷でなくして總合判斷であるとしなければならぬ。分析判斷はデカールより見れば本來離して考へることの出來ぬものを離して考へて、結

付けたといふ形としたものであつて、嚴密な意味に於て結合でない、従つて判断といふとは出來ぬ筈である。但しデカルトも此形の、眞の判断とは云へない、カントの分析判断の定義「主辭と賓辭との結合が同一に依て……考へらるゝ」*die Verknüpfung des Prädikats mit dem Subjekt durch Identität……gedacht wird*に精密に適合した判断の存在を認めて居る。而かもカントと全然同一の文章を以て之を例示して居る。即ち規則第十五の條下(S. 84 f.)に下の様に説いて居る。「物體は延長す」*Corpus est extensum*なる命題に於て物體と延長とは一應別のものを示して居るが併し吾々の想像に於て二つの判別された觀念を形造り得るかといふに不可能である、吾々が想像するは唯延長する物體の一觀念あるのみ。此命題は其實「延長者は延長す」*Extensum est extensum*といふのと同である。之に反して「バウルスは富めり」といふ命題は「富者は富めり」といふの同一でない云々。デカルトの此引例及び説明は必然的結合の説明を目的としたのではないが、併し主賓の同一 *Identität* に依つて考へらるゝカントの説明判断の概念が茲に明かに現はれて居る。

斯くてデカルトに依れば一切の確實なる認識の根本、即ち演繹の根本的要素たるべき必然的結合はカントの意味に於ける先天總合でなければならず、而してそれが

カトンの場合と同様認識の妥當性と限界とを決定するものであると解することが出来る。斯くてデカールトは其必然的結合の概念に依て、後にヒュームの懷疑論の燒點となり(分析的ならざる結合が如何にして必然的なり得るか、更にカントの認識論の出發點となつた點を突止めたのであるといふことが出来る。

但しデカールトは此先天總合が如何にして可能なるかを解決して居ない。彼はカントと同様一切の確實なる認識の根柢は其れでなければならぬ、而して其れは純粹悟性に基礎を有せねばならぬ、といふことを動かす可らざる眞理と認めしたが、併し此純粹悟性の概念に依て問題は課せられたのであつて解かれたのでないといふことを意識しなかつた。此點は實に彼を獨斷論者としてカントより區別する重要點である。併しデカールトは既に可なり明かにカントの方向に向つての此問題の解決の基礎を置いて居る。規則第一に依れば吾々の認識に於ける統一は多様な對象に存せずして理性に存する。理性に依り、其れの統一の法則に依りて初めて表象は對象に關係せしめらるゝ、或は表象の眞僞が決定せらるゝ。(S. 38) 更に前に叙した規則第十二の所説によるも、感官及び想像は其自身にては何等對象の認識を與へぬ、唯其材料を供給するのみ。感官及び想像の表象を對象化するは悟性概念に依る判斷。

作用である。此デカートの思想を精密にたどり行くならば當然カントの解決の方法、即ち純粹直觀及び純粹悟性の法則(デカートが *intuitus* なる一概念に總括した)は、之に依て初めて表象が對象に關係せしめられ、従つて又眞の認識としての經驗が可能となるといふことよりして、經驗の對象に對する其妥當を導出すといふ思想に到達せねばならぬ。蓋しデカートが斯の如くカント思想の基礎を置きながら、其れを完成することの出来なかつた重なる原因の一は當時の科學の狀態にあつたと考へらる。カントの如き意味に於て學としての經驗が如何にして可能なるかを問はんが爲めには先づ左様な學としての經驗が儼存せねばならぬ。然るに此の如き學としての經驗は當時漸く芽ぐみ始めたのみであつて、デカート自身現に充分の確信を缺いた勞作の結果を以て其成立に貢獻せねばならなかつた。ニュートンの後に出でたカントは完成した科學に信賴して批判的研究に従事するを得たが、デカートの批判的研究は此點に於て機運未だ熟せざる時期に現はれたのである。

(一) *Buchanan* 譯 *Regeln zur Leitung des Geistes*。以下書名を示さざるものは皆な同様。

(二) デカートの *intuitus* は後に説明すべきやうにカントが直觀、*Anschauung* と概念とを區別したやうな意味に於ける直觀と同義でなく、更に之よりも廣汎なものである。其故に此意味の直觀と區別せんが爲めに便宜上、直覺と譯して置く。

(三) デカートの心理説に依れば、認識の力は物體と峻別されたる純精神的能力にして、彼は之を意志と區別せんが爲めに悟性 *intellectus* と呼んだ。此悟性は物體を通じて精神に作用するところの感官 (*sensus*)、記憶 (*memoria*)、想像 (*imaginatio*) 等と、時には結付き、時には全然之より獨立に働き、時には之に影響し、時には之に影響される。悟性が全然獨立に働く場合には之を純粹悟性曰 *collectivus spiritus* と呼んだ。即ち此心理説は後に彼れの體系の根柢を形造る二元論的形而上學を背景として成立つて居るものであるが、併し彼は此形而上學及び心理説には何等の論證をも興へて居ない、而して此處では其れは全然假説的であつて其れより續き來る結論には全然無記である、恰かも幾何學の證明に於て吾々は任意の假定を設けるが併し證明の結果に對しては其れは何等の影響を及ぼさないと同様であると説いて居る。

(四) デカートの *imaginatio* 又は *phantasia* は感官 *sensus* より來つた表象の作用である。Bruckmann は屢之を *simultane Anschauung* と譯して居る。

(五) 體系に於ては此區別を形而上學的に解して物體即延長の思想に到達した。